

ペンギン探しも地図が頼り



目黒学院高等学校

上田一生

ペンギンの住処

不幸なことに、野生のペンギンは南半球にしかいない。だから、ペンギンに会いたい北半球の住人は、いつも赤道を越えてはるばる出かけていかなければならない。

しかも、ペンギンはわかりやすい所にはいない。もちろん例外はある。たとえば、ニュージーランドやオーストラリアには人家の縁の下を住処にしているコガタペンギンがいるし、南アフリカには別荘地で人間と同居しているケープペンギンというのがいる。

とはいって、18種類いるペンギンの多くは、ふだん人間の目にたやすくふれるような所にはいない。南極はその最も典型的な例だ。もちろん、昭和基地など各国の観測基地のすぐ近くに生息しているアデリーペンギンなどもいることはいる。しかし、南極は元来人間がふつうに生活できる場所ではない。つまり、ペンギンの多くはアネクメネに分布しているのだ。しかも、多くの場合、ペンギンのコロニー（集団繁殖地）は絶海の孤島にある。

赤道直下のガラパゴス諸島、南極海ストレスに位置するフォークランド（マルビナス）諸島、ニュージーランドの南方海上に点在するオークランド諸島、スネアーズ島、そして南インド洋に浮かぶクロゼ諸島など数え上げればきりがない。

それらの島の多くは、すでに調査が行き届き、詳細な地形図などが作られている。しかし、なかには島の存在や外観は海図上に描かれていても、陸上の地形についてはほとんど空白という例がないわけではない。そういう島でペンギンの調査を

することになった研究者などは、ペンギンを調べる前にまず島の地形を確認する作業からとりかからなければならない。つまり、島中をくまなく歩き回るハメになる。こう書くと簡単なようだが、ほとんど人跡未踏の孤立した島をくまなく踏破するのは、そうたやすいことではない。

ペンギンの生息地というとすぐに南極を連想するだろうが、18種類いるペンギンで南極でしか繁殖しないものはわずか3種類に過ぎない。他の15種類の多くは、いわゆる亜南極圏やその縁辺に点在する島々に分布している。これらの島々は、常に南極からの強風や高波にさらされているので、波打ち際が100m以上の断崖に閉まれていることが多い。

また、南極からの風は低気圧となり寒冷前線とともになって波状的に島に押し寄せる。南半球の夏である12~2月でも、日中30分に1回くらいの割合で雹や霰が降ったりする。だから降水に恵まれた島は、高緯度にもかかわらず植生が豊かだ。島に上陸した者は、濃いブッシュをかき分け、ぬかるみに足をとられながら這うようにして前進しなければならない。

イワトビペンギン

一昨年の12月から1月にかけて、NHKの取材・調査チームとともにマゼラン海峡を航海した時も、上陸したいくつかの島は細かい地形図のない島だった。この時は、専門的な研究調査ではなかったから、本格的な測量器具は持参しなかった。地元のガイドも「ああ、そのペンギンならすぐに見つかるよ」と気楽に請け合ってくれたので油断していたのだ。

目的のペンギンはイワトビペンギンという。一昔前、整髪料のコマーシャルで有名になった「ロッキー君、ホッパー君」のモデルだといえば思い当たる方もいらっしゃるだろう。頭にある黄色い飾り羽がチャームポイントだ。

問題の島は、マゼラン海峡をやや南西に出た太平洋側にあるレカラーダ島という。チリのプエル



帝国書院地図帳より

トモンを出港し、壮大なフィヨルドの間を縫って7日間航海しないと辿り着けない。「いいかい、ここはもう文明世界じゃないんだからね」というガイドの忠告をうけつつ、ゾディアックという船外機付ゴムボートに乗り移って上陸する。もちろん波止場などというシャレたものは一切ない。

この島には2種類のペンギンが生息していて、その一つであるマゼランペンギンはすぐに見つかった。しかし、ガイドの記憶している場所にいるはずのイワトビペンギンが、どこを探しても見当たらない。本船やゾディアックを使って海岸線を観察しても収穫はなかった。

地図がないのでコロニーが探せない

島に到着した翌日から、大きな低気圧と寒冷前線が接近してきたため、海岸には大波が打ち寄せ、沖合には10mを越えるうねりと波が逆巻く悪天候となった。驟雨と霰が10分おきに襲う。調査期間のことを考えると、一刻も早くイワトビペンギンの存否を確認しなければならない。

ここにいたって、詳細な地形図がないという事実が重大な意味をもって我々一行にのしかかってきた。船やゾディアックを出して海上から海岸を探索することは危険でできない。だとすれば、陸上を歩いてイワトビペンギンのコロニーがあると思われる海岸を探査する以外はない。しかし、地図がないのだ。

船の海図には島の制高点と標高は示してあるが、等高線は全くない。島は、波打ち際の一部を除いて植生で覆われていて、細かい起伏や踏破可能なルートを直接観察して確認することができない。

3日目になって、驟雨の中を撮影機材を抱えた特別探査チームが上陸したが、1kmも進まない

うちに、ブッシュのぬかるみに足をとられて計画は頓挫した。おまけに、水かさの増した小川に小型カメラを落とすという損害まで出てしまった。念のために加えておくが、探査チームは全員アウトドアの大ベテランである。

結局、悪天候はその後3日間続き、調査活動はマゼランペンギンだけに集中して行われた。周囲約10kmの小島だが、ナメてはいけない。厳しい自然が牙を剥き壁をつくれば、近代的な装備と経験を積んだ人間たちでもまったく歯が立たないのだ。地図のありがたみを身をもって痛感した旅だった。

プロフィール

昭和29年東京都生まれ。國學院大學卒、ペンギン会議(ペンギンの保全・研究推進を目的とするNGO:1990年設立)研究員。1988年以降、ペンギンの生息地で調査・研究・保全活動を実施。国際会議のコーディネーター、エコ・ツアーの企画・実施を手がける。

著書『ペンギンの世界』(岩波書店)『ペンギン図鑑』(文溪堂)など。訳書『ペンギン大百科』(平凡社)『ペンギンになった不思議な鳥』(どうぶつ社)など。